

# 大乘仏教と臨死体験

令和元年 5 月

敏翁

## I. 大乘仏教非仏説

もう大分時間が経ちましたが、『法華経と浄土三部経』と題してお話ししましたね。

その大乘仏教の代表的存在である法華経と浄土三部経、そのいずれも

大乘非仏説の批判にさらされてきました。

法華経については、植木雅俊氏(前報出)らがこれは仏陀が説いた真意に繋がっていると述べ、

又浄土思想については、藤田宏達氏(前報出)らが仏陀が直接述べた言葉に近い小乗の教えの

中に大乘の芽生えが見えると述べる等反論は数多くありました。

この大乘非仏説についての面白い書籍が昨年夏発売されています。

### ① 大竹晋著 『大乘非仏説をこえて』…大乘仏教は何のためにあるのか

図書刊行会 平成 30 年 8 月 20 日発行

がそれです。

本の「腰巻」に

『それは、仏教が仏教をこえるためにある！

原始仏教・部派仏教とは異なる 大乘仏教の存在意義を明確に説く斬新な大乘論！』

とあります。

その全貌は広範囲に亘っていて短文で紹介は困難ですが、

その結論のところをご覧に入れたいと思います。

**結論** 大乘仏教は仏教を超えてゆかずにいられない(① pp.235-248) から

1 はじめに と 6 大乘仏教は何のためにあるのか と

7 おわりに を下記 URL に掲載してあります。

ご覧になるには下記赤下線をクリック願います。

1 から本書の構成の大綱がわかると思います。

尚、2 大乘仏教は独立した宗教である 3 独立は墮落の免罪符たりえない

4 歴史的ブッダは上座部に任せよ 5 大乘仏教は混血性を誇ってよい

は省略してあります。

**結論** 大乘仏教は仏教を超えてゆかずにいられない

尚、何時も言っていますが、上記 pdf を読むのには、上記 URL をクリック後、

"CRL"キイ+"SHIFT"キイ+"-"キイを同時に押して文章を反時計方向に 90 度回転

させると読み易くなります。

この pdf をご覧頂くと本書の雰囲気は分かると思いますが、本書の要点を私なりに強引に纏めて見ると次の様にも言えると思います。

『大乘仏教のアイデンティティは、他者を救うたなら仏陀が定めた戒律、例えば殺生(①p.150)でさえも破るべきだという利他ゆえの「仏教」否定である』(①p.247)

この考えはさらにもう一つ拡大すると、大義の為の捨身布施、さらに私論『仏説大東亜戦争』に繋がるものと思いたい大いに気を良くしている次第です。

## II. 臨死体験

この書籍で私の関心を大きく引いたもう一つは、大乘仏教と臨死体験との関連が論じられているのを発見した事です。

私は以前エリザベス・キューブラー＝ロスの「臨死体験」に関する書籍を読んで、同様な想いを持ったことがあったからです。

その後家内の死後得た知識も含めて説明して見ます。

臨死体験は、個人差はあるが一定のパターンがあり、その中に「光の生命に会う」というのがあります。(より詳細は後述)

この光が浄土三部経の阿弥陀如来に対応するという考えなのです。

浄土真宗のお内仏(仏壇を真宗ではそう呼ぶ)の標準的な配置を見ると、中央に光を放つ阿弥陀仏の掛け軸があります。



阿弥陀とは、サンスクリットの「アミターユス」(無量の寿命、即ち無量壽)と「アミターバ」(無量の光)を意味します。

(この辺の議論は、藤田宏達著『原始浄土思想の研究』岩波書店 1970年 に詳しい)

その両脇の掛け軸に、右に十字名号(帰命尽十方無碍光如来)、左に九字名号(南無不可思議光如来)で、ここにも光があるのです。

それでももう少し調べて見たくなり、関連する書籍を探してみると図書館に沢山あり、借りて読んでいくところでした。

その中で一番お勧め出来るのは、

② 立花隆著『臨死体験』上下巻 文芸春秋社発行

でしょう。

この初出は「文芸春秋」1991年8月号～1994年4月号 と少し古くその後の研究も活発な様で、

ウィキペディアに可成り詳細が載っていてこれだけでも臨死体験の概要は掴めると思いますが、1992年以來大きな進展は無い様に見えます。

以下、ウィキペディアから要点を紹介してみます。

## 2.1. 臨死体験のパターン

臨死体験には個人差がある。ただ、そこに一定のパターンがあることは否定できない。

1. 死の宣告が聞こえる      心臓の停止を医師が宣告したことが聞こえる。
2. 心の安らぎと静けさ      言いようのない心の安堵感がする
3. 耳障りな音              ブーンというような音がする
4. 暗いトンネル              トンネルのような筒状の中を通る
5. 体外離脱をする
6. 他者との出会い          死んだ親族やその他の人物に出会う
7. 光の生命に出会う        神や自然光など
8. 省察                      自分の過去の人生が走馬灯のように見える。人生回顧(ライフレビュー)の体験。
9. 死後の世界との境目を見る
10. 蘇生                      生き返る

以上の内、「7.光の生命に出会う」については既に触れています。

この臨死体験を解釈する立場は大別すると次の二つに分かれます。(より詳細は、②またはウィキペディア)

- 脳内の生理的反応で総て解釈できる。
- 靈魂の存在を仮定しないと解釈できない。

この場合、後者に対する最も強力な論拠は「5.体外離脱」です。

## 2.2. 体外離脱

臨死体験中には体外離脱現象が起こることが知られている。全身麻酔や心拍停止で意識不明となった時に、体験者は気が付くと天井に浮かび上がっており、ベッドに横たわっている身体を見下したり、手術をドクターの側で手術中の様子を客観的に眺めている自分に気付く。

そうした体験は現実世界以上の強烈なリアリティーが伴うため、幻想ではないと語る者も多い。

こうした体外離脱中には幻覚的な体験が起こることもあるが、現実世界で起きた出来事を体験者が後に正確に描写できる事例も珍しくない。(より詳細がウィキペディアにあるが省略)

併し、靈魂説を客観的に証明しようとする多くの試み(立花書にも多くの紹介がある)があるが、未だ出来たとする報告はまだ見当たりません。

## 2.3. W.ジェームズの法則

この点に関して、②(下巻 第 21 章 W.ジェームズの法則)に面白い記述があるので紹介したいと思います。

(前略)

体外離脱だけでなく、超常現象一般に関して、こういう曖昧な証拠以上のものがなかなか得られないという問題がある。人のいうことを信ずればそれは真正であることになるが、人のいうことを疑いだすと何も信じられないというたぐいの現象報告が沢山あるのである。

先だって、NHKテレビの企画で、オカルト研究で有名なコリン・ウィルソンに会い、超常現象一般に関していろいろ議論を交わすという番組を作ったのだが、そのとき、この超常現象の客観的証明の問題が話題に出た。

コリン・ウィルソンは、

「この問題は、昔から指摘されたことなんです。不思議にある程度の証拠は沢山出てくるけど、誰も疑問を持つ余地のない絶対的な証拠というのは出てこない。これはウィリアム・ジェームズ（アメリカの心理学者、哲学者。一八四二～一九一〇。超常現象の科学的研究に取り組んだ）が云ったことなんですけど、どうも、超常現象の証明というのは、本質的にそういう限界を持つてんじゃないか。なぜそうなのか理由はわからないけど、超常現象を信じたい人には信じるに十分な証拠が出る一方、信じたくない人には否定するに十分な曖昧さが残る。ちょうどそういうレベルの証拠しか出ないのが超常現象であると。これを我々はウィリアム・ジェームズの法則と言っています」と言って笑った。

たしかにこの領域の問題を追いかけていくと、不思議にこの法則を思い出させる話が沢山出てくる。

(以下略)

②には、そのような実例が多数紹介されています。

### Ⅲ. 臨死体験・その後の検討など

前にも記しましたが、②以降大きな進展は見当たらないのですが、調べた中から良く纏まっていると思った次の書籍を紹介させていただきます。

③ エリコ・ロウ著『死んだ後には続きがあるのか--臨死体験と意識の科学の最前線--』  
扶桑社 2016

著者はジャーナリストですがサブタイトルにある通り、最近の研究まで良くレビューされていると思いました。

この書籍の第五章 「魂の存在は証明できるか？」は、7つの節からなっていますが、その中から3つの節を抽出する事にします。先ずは、実証実験的に魂の存在を証明しようとする試みは旨く行かず、ここでも「W.ジェームズの法則」が生きている話です。

#### i. 魂が生き続けることを、死んでから証明しようとした科学者たち

次に魂の存在を仮定しないと説明出来ない話2つの節です。

#### ii. 輪廻転生の実例

#### iii. 生まれる前の記憶の研究 日本

何れも赤下線をクリックしてご覧頂けます。

#### IV. 終わりに

以上、大竹晋の大乘仏教の捉え方は、大義の為の捨身布施を正当化するもの、即ち私論『仏説大東亜戦争』の考え方の根底を確かなものと言えると思います。

しかし、これは私が大乘仏教を信じているという事ではなく、日本民族の心の奥底に共同幻想として大乘仏教が根付いている事を確認出来たと言うに止まります。

また私は昔から宗教には大いに関心を持ち、例えば四国八十八ヶ所、西国三十三観音、坂東三十三観音、秩父三十四観音を回ったほか、スペイン最西端にあるキリスト教の聖地サンチャゴ・デ・コンホステイラへの巡礼路も車で走破しています。(それらの何れもその詳細は私の本ホームページにあります)

しかし私は、近代人としての科学的教養(?)が邪魔をして神仏を信じ切る事は出来ません。

ここに新しい視点から突破口を開くかもしれないのが、臨死体験を中心とした魂の存在問題の研究の様な気がしてなりません。

どうも現在の医学、科学では説明出来ないが、身体と離れた魂の存在は確かな様に思えます。

そして、その魂が身体が完全に消滅した後にも存在するかどうか問われる問題だと思ふのです。

③のii.やiii.などは死後の魂の存在を示していると思いますが、その存在の有無を実証実験的に証明する手段は無いが、あれこれ楽しみながら考慮を重ねている今日この頃です。

多分近代科学の論理と全く異なる領域の学問の展開が必要な気がして、私などの手に負えない問題だとは思いますが。

尚、この問題について、欧米の俊英たちが様々な理論を提出していて、③の第六章

「死後の世界と意識の正体、宇宙の関係」に紹介されていますが、見たところ納得出来そうもないものばかりに思えて、これ以上は触れずに本稿を終わりたいと思います。